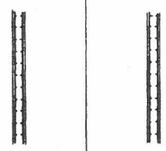
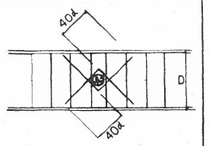
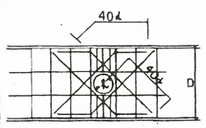
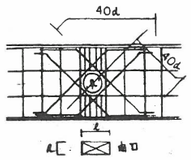
壁及び壁柱リスト 1/60

注) 中止メ筋は D10 - 四隅用補強筋とする

符号		W22 (25)	W20	W18	W15	W12 (10) <13>		CB10 (15)
厚さ		220 (250)	200	180	150	120 (100) <130>		100 (150)
断面								
縦筋		D10 - 200ᵠ ダブル	D10 - 200ᵠ ダブル	D10 - 200ᵠ ダブル	D10 - 150ᵠ シングル	D10 - 250ᵠ シングル		D10 400ᵠ シングル
横筋		D10 - 200ᵠ ダブル	D10 - 200ᵠ ダブル	D10 - 200ᵠ ダブル	D10 - 150ᵠ シングル	D10 - 250ᵠ シングル		D10 400ᵠ シングル
開口補強筋	タテ・ヨコ	2 - D16	2 - D16	2 - D13	2 - D13	1 - D13		
	ナナメ	2 - D16	2 - D16	2 - D13	2 - D13	1 - D13		

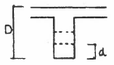
梁貫通孔補強平面図

注) 壁中のスリーブ貫通補強はタテヨコとも 2 - D10 とする

孔径	h ≦ 100	h ≦ 200	h ≦ 250	h × ℓ = 250 × 500
配筋図				
斜メ補強筋	2 × 2 - D13	4 × 2 - D13	4 × 2 — D16	4 × 2 - D16
タテ補強筋	2 × 2 - D13	2 × 2 - D13	2 × 2 — D13	2 × 2 - D19
ヨコ補強筋	—	2 × 2 - D13	2 × 2 - D13	2 × 2 - D19
帯 S.T	—	3 × 2 - D13	4 × 2 — D13	8 × 2 - D13

補強零領

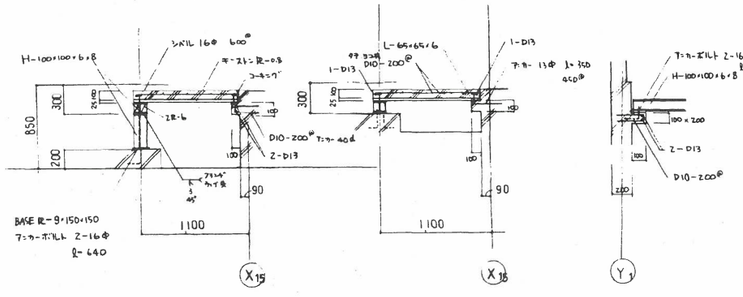
1. 孔の径が梁せいの 1/10 以下の場合は補強筋は必要としない。
   但し 孔の径が 150 以上の場合は補強すること
2. 孔が円形でない場合は外接円孔におきかえて上記の補強零領を適用する。
3. 孔の上下方向の位置は梁せいの中心附近とし下記による



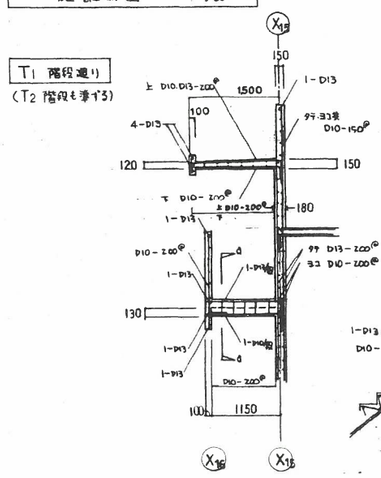
500 ≦ D < 700	d ≧ 175
700 ≦ D < 900	d ≧ 200
900 ≦ D	d ≧ 250

4. 孔の中心位置は柱及び直交するはり(小梁)の面から 1.2 D 以上離すことを原則とする。
5. 孔が並列する場合は、その中心間隔は孔の径の平均値の 3 倍以上とする
6. 補強筋は原則として主筋の内側とする。
7. たて筋はあばら筋とみなす。

プールサイド詳細図 1/30

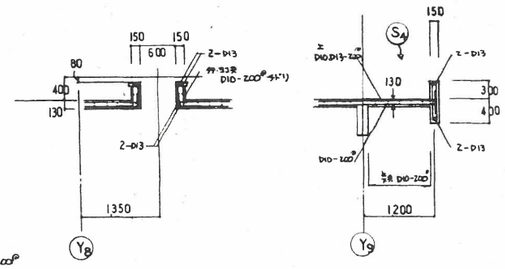


雑配筋図 1/60



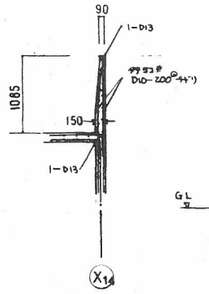
e-e 断面

トッ,プライト立上り

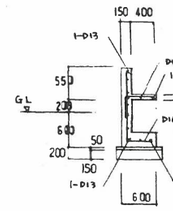


瓦・立上り

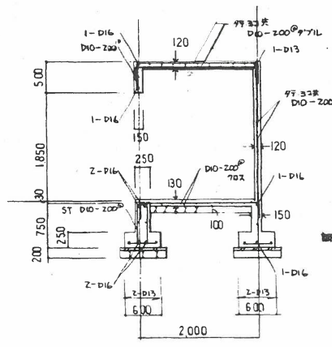
手摺 II 上り



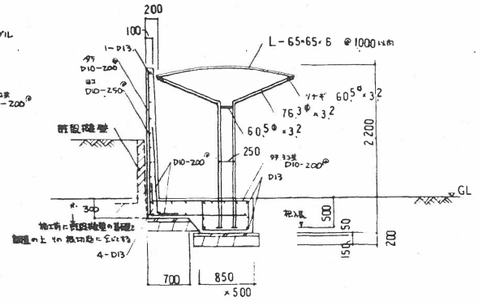
手洗い



遊具倉庫

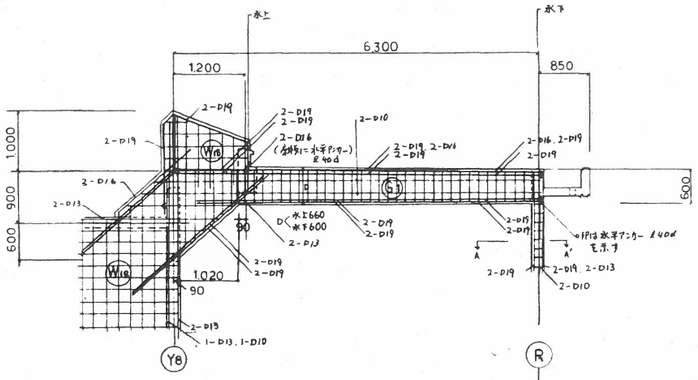


物置 ガレ自転車置場

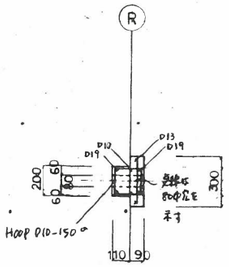


件名	賀屋市立打出保育所建替建築工事	年度	57
図種	壁及び壁柱リスト / 雑詳細図 1:30 1:50	図番	C 8/10
設計年月日		芦屋市建設部 建築課	
製図	設計		

福

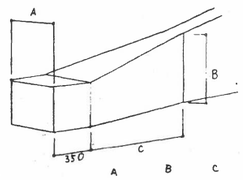


(X11) 通 (G1) 梁配筋図 1/50

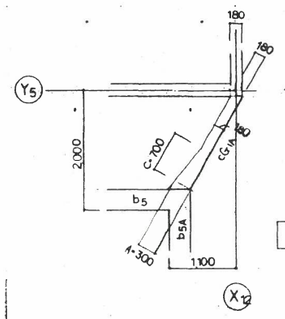


A－A' 断面図 1/20

CG1, CG1A, CG1B 梁 形状図

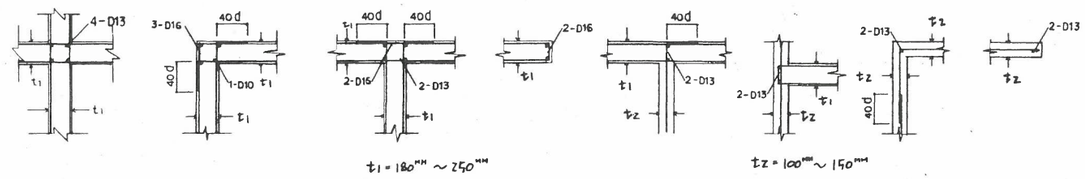


	A	B	C
CG1	250	≠490	≠440
X12通 CG1A	300	≠700	≠700
Y3通 CG1A	300	≠700	≠700
CG1B	180	—	—

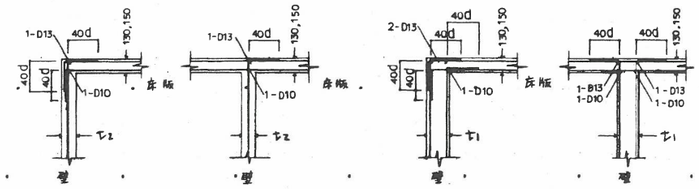


(X12) 通 CG1A 梁伏図

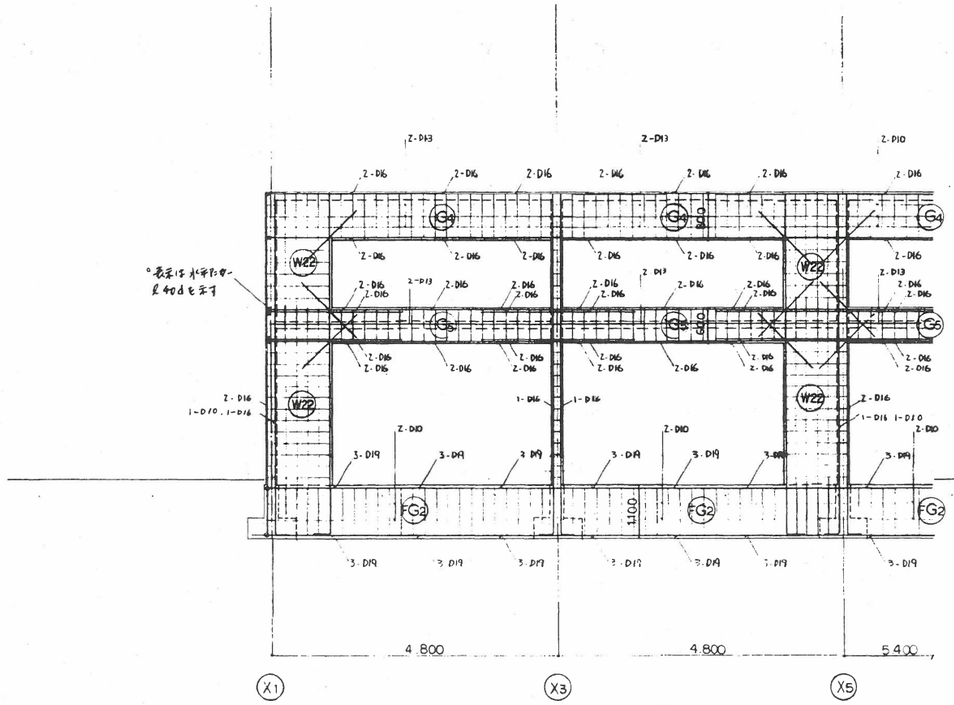
1) 壁ヨコ筋及び補強筋定着　　註) 梁の定着も準ずる



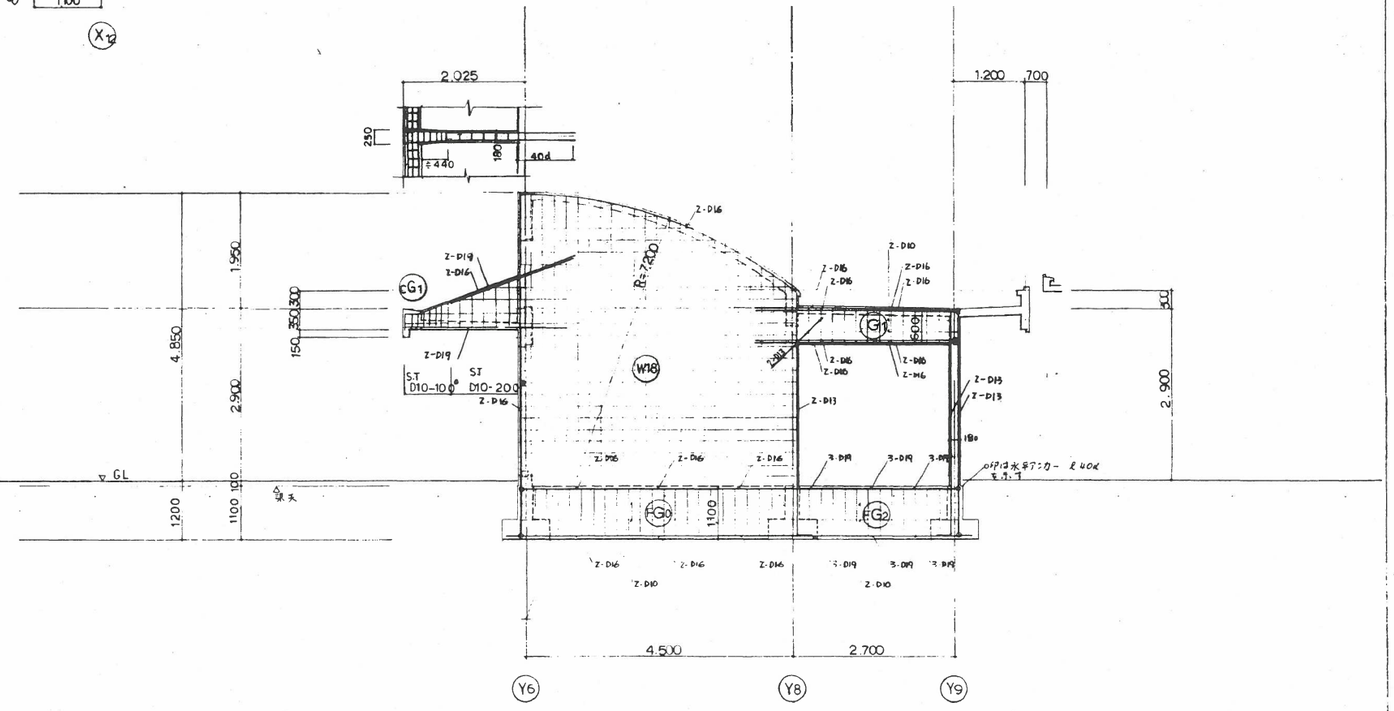
2) 壁と床版筋の定着



壁端部及び隅角部並びに床版筋の定着配筋規準図 1/30



(Y6) 通 架構配筋図 1/50



(X3) 通 架構配筋図 1/50

註) ・図中特記なき壁配筋は W22, W18 共 D10 200@ 2列 2組 3組 とする.
・　〃　ST 共 D10-200@ とする
・　〃　開口補強斜筋は 2-D16 (W22) とする

件名	芦屋市立打出保育所建替 建築工事			年度	57 福
図種	架構配筋図 雑詳細図 1:20 1:30 1:50			図番	C 9/10
設計年月日					
製図		設計		校図	芦屋市建設部 建築課

鉄筋コンクリート構造配筋標準図(単位mm)

§ 1 一般事項

1－1 基礎
1－2 コンクリート
1－3 鉄筋
1－4 その他

特記仕様書参照

○設計図に記載なき場合は、本標準図に従うものとする。
又、本標準図に明記なき場合は、JASS 5による。

○印 表示ものも適用する。

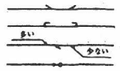
§ 2 共通事項

(一－1) 鉄筋の表示記号

鉄筋の表示記号は下表による。

記号	•	×	ø	●	○	⊗	⊠	⊗
異形鉄筋	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
丸鋼	9 φ	13 φ	16 φ	19 φ	22 φ	25 φ	－	－

○フックのない場合
○フックのある場合
○本数に差がある場合
○圧接継手表示



(一－2) 鉄筋の折り曲げ

鉄筋末端部 (d：鉄筋の公称直径)

鉄筋の折り曲げ角度	図	鉄筋の種類	鉄筋の折り曲げうちのりすぎ法(D)	鉄筋の余長	備考
180°	余長	SR24, SD24	3 d以上	4 d以上	
		SD30, SD35	4 d以上		
135°	余長	SR24, SD24	3 d以上	6 d以上	
		SD30, SD35	4 d以上		
90°	余長	SR24, SD24	3 d以上	8 d以上	
		SD30, SD35	4 d以上		

鉄筋中間部 (d：鉄筋の公称直径)

鉄筋の折り曲げ角度	図	鉄筋の使用箇所による呼称	鉄筋の種類による区分	鉄筋の種類	鉄筋の折り曲げうちのりすぎ法(D)
90°以下		1) あばら筋 帯筋 スパイラル筋	各種	SR24 SD24	3 d以上
				SD30 SD35	4 d以上
		2) スラブ筋 壁筋	16 以下	SR24 SD24 SD30 SD35	5 d以上
			19 以上		(8)による
		3) 1)2)以外の鉄筋	丸鋼は28φ以下 異形鉄筋D25以下		6 d以上
			丸鋼は32φ以下 異形鉄筋D29以上D41以下		8 d以上

(一－3) 鉄筋の定着及び重ね継手の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度の区間(kg/cm²)	定着長さL 一般	下端筋 小梁	下端筋 床スラブ・階段スラブ	重ね継手の長さL
SR24	210以上 270(240)以下	35 d フックつき	35 d フックつき	15cm フックつき	35 d フックつき
	135以上 210未満	45 d フックつき			45 d フックつき
SD30	225以上 270(240)以下	35 d または 25 d フックつき	35 d または 15 d フックつき	10 d かつ 15cm以上	40 d または 30 d フックつき
SD35	135以上 210未満	40 d または 30 d フックつき			45 d または 35 d フックつき

コンクリートの側面のあそれのある部分はL^*とし、$L^*=L+5d$とする。

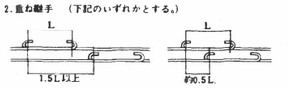
1. 末端のフックは、定着及び重ね継手の長さには含まない。
2. dは鉄筋の公称直径とする。
3. 直径の異なる鉄筋の重ね継手の長さは細いほうの鉄筋の公称直径とする。
4. ( )内は軽量コンクリートの場合を示す。
5. 表中にない種類の鉄筋を用いる場合、下端筋の定着の長さ以外は日本建築学会「鉄筋コンクリート構造計算規準」17条による。
6. 梁及びスラブ筋の定着のための中間折り曲げにあっては表中の定着長さし(又はL^*)にかかわらず、柱及び梁の中心をこえてから折り曲げる。

(一－4) 継手一般

1. 圧接継手

間隔：$a \geq 400$　　芯ずれ：$e \leq 0.2d$　$d' \geq 1.4d$

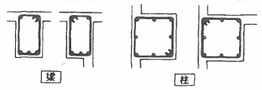
2. 重ね継手 (下記のいずれかとする。)



3. D29, D32の継手は圧接としなければならない。
4. 鉄筋径の差が7をこえる場合は圧接としてはいけない。

(一－5) 鉄筋のフック

○下記の1.～6.に示す鉄筋の末端部にはフックをつける。
1. 丸鋼　2. あばら筋及び帯筋　3. 煙突の鉄筋
4. 柱及び梁(基礎梁を除く)の出すみ部分の鉄筋(下図参照)



上図の＊印の鉄筋の末端にはフックが必要。

5. 単純梁の支持端及び片持梁、片持スラブの上端筋の先端
6. 最上階及びこれに準ずる個所の柱頭のすべての鉄筋

(一－6) 鉄筋のあき

○鉄筋のあきは、原則として下記による。
丸鋼　1.5 d 以上
異形鉄筋　1.7 d 以上
粗骨材の最大寸法の1.25倍以上
かつ 25以上

d：公称直径

○鉄筋径が異なる場合は大きい方による。

(一－7) かぶり厚さ

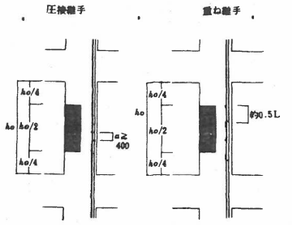
鉄筋に対するコンクリートの設計かぶり厚さと最小かぶり厚さ

構造部分の個所		コンクリートの種類 普通コンクリート	軽量コンクリート
土に接しない部分	床スラブ・屋根スラブ・耐力壁以外の壁	30 (20)	30 (20)
	柱・梁・耐力壁・雑壁	40 (30)	40 (30)
土に接する部分	柱・梁・床スラブ・耐力壁	50 (40)	60 (50)
	基礎・擁壁	70 (60)	80 (70)
煙突など高熱を受ける部分		60 (50)	60 (50)

注) 1. ( )内の数値は最小かぶり厚さを示す。
2. 打ち放し仕上に対しては、10以上打増しすること。

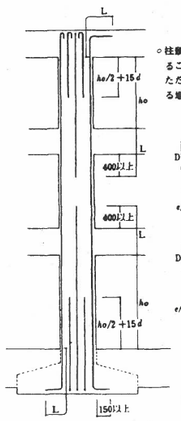
§ 3 柱

3－1 主筋の継手

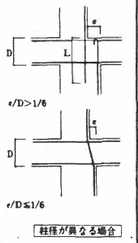


○■■■ 印内に継手中心部を設けることとする。ただし、圧接継手でやむをえない場合は、梁上端より500以上はなすこと。

3－2 主筋の定着



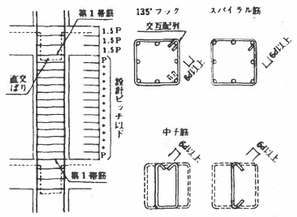
○柱筋にはすべてフックをつけることを原則とする。
ただし定着長さLを確保できる場合はこの限りでない。



柱径が異なる場合

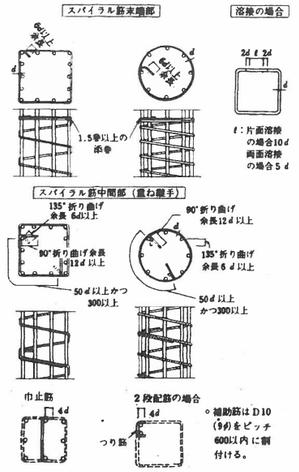
3－3 帯筋

○第一帯筋(D13以上使用の事)は、梁面に入れ、その間を設計ピッチ以下に割り付ける。
○帯筋の加工は下図による。



3－4 補助筋

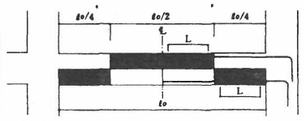
○スパイラル筋の末端処理及び継手は下記のとおりとする。
1. 末端は1.5巻以上の添巻きをし、6 d 以上の余長をもつ曲げ角135°のフックをつける。
2. 重ね継手は重ね長さ50 d 以上かつ 300 以上とし、12 d 以上の余長をもつ曲げ角90°のフックをつける。



○補助筋はD10(9φ)をピッチ600以内に側付ける。

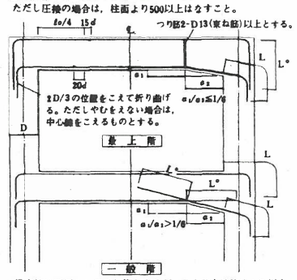
§ 4 梁

(一－1) 主筋の継手

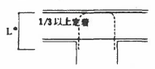


○■■■ 印内に継手中心部を設けること。
ただし圧接の場合は、柱面より500以上はなすこと。

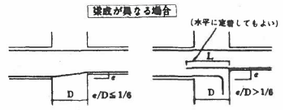
(一－2) 主筋の定着



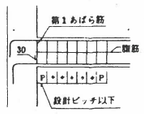
○梁主筋は原則として通し筋とするが、最上階上端筋は1/3以上柱内に定着すること。ただし柱筋が梁にL以上定着されている場合は、この限りでない。



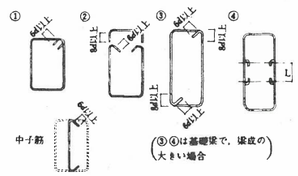
梁成が異なる場合



(一－3) あばら筋

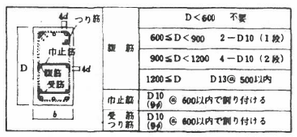


○第1あばら筋は柱面に入れその間を設計ピッチ以下に割り付ける。
○あばら筋の加工は下図による。
③③はスラブ付の場合に限る。
○溶接継手は、帯筋の項を参照のこと。



(③④は基礎梁で、梁成の大きい場合)

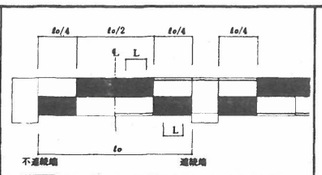
(一－4) 補助筋



		D<600 不要
腹筋	600≦D<900	2－D10 (1段)
	900≦D<1200	4－D10 (2段)
	1200≦D	D13@ 500以内
巾止筋	D10 (9φ)	@ 600以内で側り付ける
受筋 つり筋	D10 (9φ)	@ 600以内で側り付ける

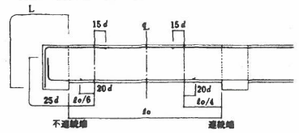
(一－5) 小梁及び片持梁

a) 小梁



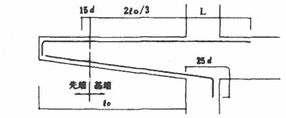
○■■■ 印内に継手中心部を設けること。ただし圧接の場合は梁面より500以上はなすこと。

定着



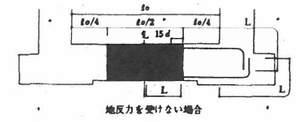
b) 片持梁の定着

○下端筋は水平定着でも可。

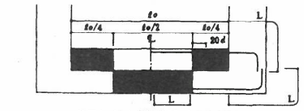


(一－6) 地中梁

a) 地中梁の継手及び定着

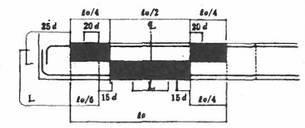


地反力を受けない場合



地反力(または杭反力)を受ける場合

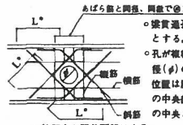
b) 地中小梁の継手及び定着



地反力を受ける場合

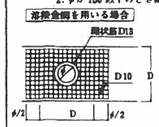
○■■■ 印内に継手中心部を設けること。ただし圧縮の場合は、柱面(地中小梁の場合は、梁面)より500以上はなすこと。
○地中小梁で、地反力を受けない場合は、小梁に準ずる。

4－7 梁の貫通補強



○あばら筋と同径、同倍で@100以下とする。
○貫通孔は、はり成の1/3以下とする。
○孔が複数の場合は中心間隔を、径(φ)の3倍以上とする。また位置は原則として、スパン(ℓo)の中央部ℓo/2の範囲内で、梁成の中央とする。
○特記なき限り下記による。
1. φが100未満のとき補強を必要としない。
2. φが150以下のとき補強筋は縦横斜筋共2-D13とする。

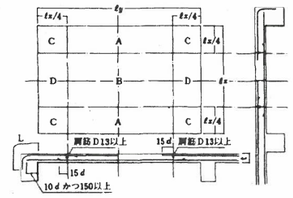
溶接金網を用いる場合



○溶接金網のピッチは100以下とし、梁の両面に入れる。
○線状筋は、溶接金網と溶接する事。

(一－5) 鉄筋の折り曲げ及び定着

§ 5 スラブ

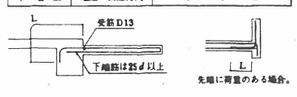


継手位置は原則として下表による。

		標準継手位置		
上端筋	短辺方向	B	D	
	長辺方向	A	B	
下端筋	短辺・長辺方向	A	C	D

(一－6) 継手

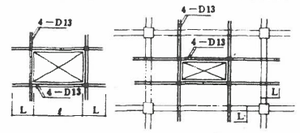
(一－7) 片持ち床



(一－4) 補強筋

開口補強

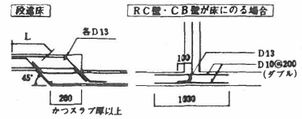
開口面積　$A \leq 0.3m^2$　かつ $\ell \leq 0.6m$
開口面積　$0.3m^2 < A \leq 1.0m^2$　かつ $\ell \leq 1.0m$



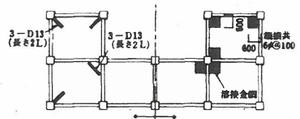
注) スラブ筋を切断しない場合は補強を要しない。

段違床

RC壁・CB壁が床にのる場合



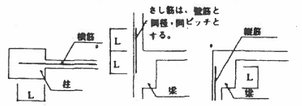
屋上スラブ隅角補強



鉄筋による方法　溶接金網による方法

§ 6 壁

(一－1) 定着及び継手



○定着及び継手長さはLとする。ただし土圧を受ける壁の外側鉄筋の定着はL^*とする。

(一－2) 標準壁リスト

壁リストに従う

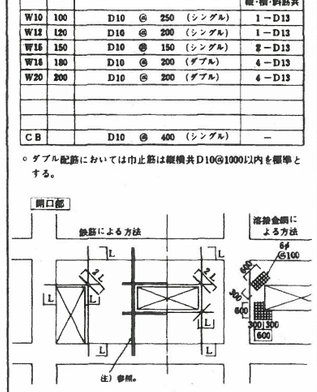
特記なき壁の配筋は下記による。

符号	壁厚	縦筋・横筋	開口部補強筋 縦・横・斜筋共
W10	100	D10 @ 250 (シングル)	1－D13
W12	120	D10 @ 200 (シングル)	1－D13
W15	150	D10 @ 150 (シングル)	2－D13
W18	180	D10 @ 200 (ダブル)	4－D13
W20	200	D10 @ 200 (ダブル)	4－D13
CB		D10 @ 400 (シングル)	－

○ダブル配筋においては巾止筋は縦横共D10@1000以内を標準とする。

(一－3) 補強筋

開口部


鉄筋による方法
溶接金網による方法
L
L
L
L
L
L
L
L
φ
φ
φ
φ
@100
@100
D10
D10
D10